

社会福祉法人 中心会

児童養護施設 中心子どもの家

感謝報恩の心

(新型コロナウイルス感染症 5類移行までの3年間を振り返って)



2023年9月10日

《はじめに》

本年5月8日に新型コロナウイルス感染症が5類に移行するまでの3年間は、私達中心子どもの家にとっても並大抵の3年間ではありませんでした。

その並大抵ではなかった道のりを、職員有志による「手記」という形で振り返って遺しておくことは、普段の仕事も役立つに違いないと思い、「感謝報恩の心」と題してまとめました。この3年間にお世話になったボランティアさんなどにも寄稿頂いています。（「感謝報恩の心」は、松下幸之助の著書から借用したものです。）

日頃から、そしてこの3年間にお世話になった全ての方々への感謝を込め、私達中心子どもの家の職員は取り組んで参りますので、変わらぬご支援をお願い申し上げます（丹）

新型コロナが5類に移行するまでの「手記」

河合真夏（男子養護係）

私が入職したのは2022年4月。コロナ第6波の真ただ中でした。そして私は同居家族2名が新型コロナに感染し濃厚接触者となっている状況下でした。幼い頃から保育士になることを夢に、保育士として働くことを待ち望み、期待と高揚感にあふれていた私が4月1日から勤務することは叶わず、自宅待機を余儀なくされました。そして、所長から出来るだけ早く勤務を始められるようにといただいた提案は自立訓練室での自主隔離でした。

私は家族の体調が安定し自分が自宅を離れても大丈夫だと感じた4月4日から自立訓練室での自主隔離生活を始めました。自立訓練室に初めて入り、ここである程度の期間、誰とも会えずに生活をしていくのか、と考えながら寂しさと無力さを感じたのを覚えています。

自主隔離生活が始まり、食事は防護服を着用した職員が届けてくれるのを受け取り、それ以外は部屋のドアを開けることなく何日かが過ぎていきました。PCR検査で自分の陰性が分かってからはすぐに部屋を出て散歩し、久しぶりに外を歩きました。陽の光を浴びるのってこんなにも気持ちがいいものか、と感じたことを覚えています。

それからは自主隔離をしながら部屋での在宅勤務として、業務マニュアルと支援ノートの誤字脱字チェック、読み込みをさせてもらい、仕事を始めることが出来ました。そして濃厚接触者の自宅待機期間を終え、自分の体調に異変がないことでようやく現場での仕事を始めることが出来ました。同期から遅れをとりながらも子どもたちに関わる仕事を出来る喜びを痛感していました。

4月16日、12日間の自主隔離生活を終え、帰宅した時には安心感で涙がこぼれそうでした。コロナ禍での勤務の大変さを感じた12日間でした。また入所児童がコロナに罹り、隔離生活をする子どもたちを見てきました。子どもたちの中には寂しくて泣いてしまう子、いつもと違う部屋で寝るのが怖い子、どこにも行けずに苛々する子、家職員の顔を見れば嬉しくて泣いてしまう子、さらに驚くのはゲームを沢山出来て楽しんでいる子。いろんな子ども達の姿を見ました。私自身、隔離生活を経験したので、その寂しさや孤独感に寄り添った声掛けが出来るように意識をしてきました。コロナが5類に移行した今でもコロナは流行っています。コロナに感染したら隔離対応をとります。コロナに感染し、隔離生活をする子どもにこれからも出来るだけの安心感を与えられるよう自分が経験した隔離生活を思い出して声をかけていきたいです。

コロナ禍での業務について

水原宏輔（女子養護係）

コロナ禍で、業務を行うようになり数年がたち徐々に対策が確立され世の中の的にもマスクを外す動きや行動の制限が消え自己判断での対応が求められることが多くなってきたように感じます。しかし、先日自身の家庭内で感染が確認できたことで改めてまだ身近にありいつどこで感染するのかが分からないということを強く感じここで改めて気を引き締め直さなければならないと感じました。

このコロナ禍で、自分自身家庭内で2度感染が起こり1度目は自分自身と妻が感染（小学生の息子は陰性）し、2度目は1人目の感染判明後に素早く検査を行い隔離対応することでさらなる感染拡大を防ぐことが出来、最短で現場に戻ることが出来ました。これは、事業所内でのコロナに関する対応が明確になっていることや、繰り返し実施している検査が慣れではなく、より確実に実施されるために必要な経験の積み重ねになっているためだと感じました。

それぞれ職員は家庭環境や通勤方法が異なるため、全員が同じ選択をすることが難しい場面もあります。しかし、各自が早い段階で情報を共有し対応策を考えることで大きな事故や被害を出すことなく今日を迎えることが出来たのではないかと思います。

コロナに限らず、今後も困難な場面に遭遇することがあるかと思いますが、全員で悩み考えつつ向き合った今回の経験を活かして取り組んでいきたいと感じました。

.....

コロナ感染症期間の手記

吉岡世理奈（女子養護係）

最初は身近に出ている人もいなく、少し他人事のように感じていたが、テレビでどんどん感染が広がっていくことが報道されるようになり、只事ではないと思いました。

子どもたちにもニュースの正しい情報を伝えることを大切にしていきました。子どもたちも不安に思う子もいれば自分は大丈夫だと思う子もいて、それぞれでした。どんどん感染が広がっていく中で、子どもたちにも気をつけるように伝えていきましたが、「子どもは死なないから大丈夫だ」という子がいましたが、自分が罹って周りにうつってその人が疾患を持っていたりお年寄りだったりしたらその人が危ないこと、病院にも入れず苦しんでいる人がたくさんいることも伝え、自分だけでなく周りも考えて気を付けていくように伝

えていきました。

ここでコロナが出てしまえば集団感染になることは確かだったため、休みの日は家で過ごす日々が何か月も続き辛いときもありましたが、なんとか乗り切らないといけない、子どもたちに言っているのだから自分自身はそれ以上に気をつけないといけないと思い行動していました。

子どもたちには手指消毒を促し、机や椅子などの消毒にも力を入れました。子どもたちにはやれるべきことをやってなってしまうたらそれは仕方ない。どれだけ気をつけていてもかかってしまうことはあることも伝え、誰かがなったときにその子のことを責めないように配慮しました。その甲斐もあり、コロナが出たとしても誰かを責めることはなく過ごせたこと、何度もPCR検査をすることがあったとしても協力してくれたこと、マスクの着用や食事時間をずらすなどの様々なことにも協力してくれました。子どもたち職員ともに苦しい状況の中乗り越えた3年間だったと思います。

.....

この3年間を振り返って

猪爪恵里子（給食課）

この3年を振り返ると、陽性者が増えてかなり切羽詰まっていた時もありましたが、職員が団結して、迅速な状況報告、隔離対応、現場の対応、事務所の対応と多岐にわたる対応をしていました。児童も協力してくれたのは事態の重大さと職員の姿を見ていたからだと思います。結果的に見ると全員のチームワークが良かったと思います。

コロナ禍で個人的に嬉しかったことは主に二つあります。

一つは「結果がいち早く判明するように対応してもらった」ことです。詳しく言うと、事務所職員さんが素早くPCR検査キットを用意し、所長が検体をすぐに検査機関に持って行って下さったことです。素早く対応していただいたことが嬉しかったです。自分が検査対象になり、検査結果を待っている時は「自分が陽性だったら、給食業務は停止になる可能性がとても高いし、そうなるとうまわりで迷惑がかかってしまう・・・」とかなり不安になっている為、結果が早く知りたいという気持ちでした。その為、迅速な対応は本当に有難かったです。

二つ目は事務所にいる自分に食事に関する連絡はすぐに伝えてもらっていた事から、調理現場にすぐ状況を伝えることが出来、食事の対応が出来たことから「自分自身も中心子どもの家の一員として貢献できたこと」です。スポーツドリンクが必要なときはすぐ提供出来たり、使い捨て容器で食事を提供する形式にすぐ変更できたこと等、食事面では迅速に対応できたと思っています。

逆に、自分もどかしかったと思うことは事務所にいることが多いのに、食事関係以外では出来ることが少なかったことです。クラスターが発生した時に周囲の職員はPCR検査キットの準備、登録、検体を取る等の作業をして忙しそうにしていたが、自分は何も分からなかったため、事務所にいるのに電話対応しかすることが出来ませんでした。皆さんが忙しそうにしているのに手伝えることがあまりにも少な過ぎると感じ、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。「緊急事態に備えて、誰にでも出来る作業を一つでも覚えておけばよかった」ととても反省しました。

.....

コロナ感染症との戦い

磯崎 誠（男子養護係）

コロナ感染症が流行している中で、中心子どもの家に就職しました。これまでになかったウイルスなので心配もありました。中心子どもの家は手の消毒やマスク着用、外出の制限などの対策があり、世界の感染者が増えている中、施設での蔓延をその都度抑えていました。

しかし、2022年2月末に初めて心の家児童2人が感染した時はびっくりしました。そこで所長と自分が陽性児童の対応をしました。事務室区域全体をレッドゾーンにして、自宅に帰宅をせず児童の食事や身の回りの対応。その中で対応職員は感染をしないようにと努めました。清潔、消毒を徹底しての20日間。感染児童の症状（発熱）はあるが、元気いっぱいでした。子どもたちが部屋の中で飽きないようにと試行錯誤しながら、ぬり絵や折り紙、DVD やゲームを用意しての対応。この陽性児童を対応した20日間はとてもいい経験になりました。清潔、消毒の大事さや職員間での報連相の重要性を感じました。

保健所の方の隔離対応時の知識を取り入れることで、それ以降の隔離対応が軽減されたり、施設内での感染をその都度最小限に留め、3年間を終えました。人生でもとても貴重な経験、勉強が出来たと思います。

コロナ感染症対策について考えたこと

加藤真理（給食課長）

ほぼ3年間のコロナウィルス感染症対策については、自分自身や職場を守るために法人からの対策方法を地道に守ることにつきました。そして施設中での感染を防ぐために、児童や他職員との接触も極力さけてきました。課員も皆同じ考えで過ごすことが出来たおかげで、コロナ感染が課内で広がる事はありませんでした。

個人的には年齢が高くなる中わずかな体調不良でも出勤が出来なくなるため日々の自身の体調管理にとても気を遣いました。

しかし、5類に移行してからのの方が様々な問題が出てくると思います。コロナウィルスの確実な治療法が確立されていない中、周りがほぼ日常の生活に戻りその中でいかに自分自身、職場を守って行くのかが今、現在の最大の悩みです。

事実、課員の体調不良の報告が遅れる事案が発生し、しかもコロナウィルスに感染していたという事がありました。そのため所長より5類に移行して気のゆるみがあったのではないかと指摘を受けました。今後、この様な事がないように心を引き締めて業務を行うようにと改めて課員に伝えています。これからも長く戦いは続くと思うので出来る限りの安全確保をしていきたいと思ひます。

.....

コロナ5類移行までを振り返って

齋藤幸穂（女子養護係長）

コロナ5類移行までの約3年間を振り返ってみると、終わりが見えず苦しい時や連日の検査に恐怖を感じる時もあったが、経験としては貴重な期間だった。そう捉えられているのは、感染症対応から得られたことが大きかったこと、コロナ禍だからこそ時間を有効に使おうと資格をとる等、自分なりに有意義に過ごせたからだと思う。

新型コロナウイルスが流行しはじめたとき、私は相模原南児童ホームで勤務しており、自分にできることとして、まずコロナとは何なのか、どうしたらいいのか、子どもたちに伝わるように「コロナ新聞」を書いた。また、緊急事態宣言が発令され、ステイホームといわれたときには、どう過ごしたらいいのか分からない子どもたちに様々な過ごし方を提案し何とか乗り切っていた。このように初めは探り探りだったのが、職員も子どもも生活に慣れ、自分で判断して行動ができるようになっていた。それだけでも成長だと感じる。

昨年度には、施設全体での八景島シーパラダイス外出やハピネスフェスティバルなどリ

スクがある上で行事を実施したが、自分たちで考えて動くことができるようになったから実施できたのだと思う。ハピネスフェスティバル前に中高生と感染症対策の話し合いをした際にはしっかりと意見が出てきて、とても頼もしかった。

職員の勤務では隔離対応や出勤停止による現場の回らなさ、度重なる勤務変更、それに加えて一時保護の送迎など、困難な場面は何度もあったが、厳しい勤務も快く受け入れてくれたり、負担が偏らないようにと変更を申し出てくれたりと、協力があったから乗り切ることができた。私自身、昨年度後半は直接的な感染症対応からは外してもらった為、他の職員に負担をかけてしまったが、協力してもらえたことにとても感謝している。こうした職員間で協力する姿勢や、その時々で最善を考えて判断すること、リスクを覚悟しても選択すること等、感染症対応に限らず平時の仕事、ケース支援に生きる力が得られたと思っている。

いまでも現場では油断ならない状況には変わらないだろうし、平時に近づけば新たな問題も起きているのではないかと想像している。この5類移行に伴って得ているものもあると思うので、育児休暇からの復帰後にはたくさん学ばせてほしいし、私も鈍ることないよう過ごそうと思う。

.....

コロナ禍の3年間を振り返って

内山博子（元里親支援専門相談員）

コロナが第5類になり、世の中はマスクを着用しない生活になってきました。私は私が生きている時代にコロナのような大きな感染症が世の中に蔓延するとは、思いもよらないことで、本当にビックリしました。

まず、学校があのように長い期間休みになることも考えられないことでした。あの期間、本当に大変でした。急に自分の仕事に孤独を感じ、里親交流も行えなくなったところから、自分の存在意義は何だろうと考えることが増え、急にやりがい無くしました。

また、コロナに罹ったら、どうなるのか。どこからコロナがやってくるのか全く分からず、無防備に殴られている状況で、怖いという気持ちだけが先行し、流言飛語に惑わされそうになることもありました。罹らないように家族へ外出の制限・消毒の励行をお願いしました。

職場では、罹る前から防護服の着脱やN95マスクの使用方法の確認、フェイスシール

ドを作ってみたりもしました。感染者が出た際には、どの場所でどのように対応するかイメージしてみたりもしました。

地域の皆様の応援の手紙や、布マスクを作成して郵送くださる方々の気持ちに随分励まされたことも覚えています。

登校できない間、現場職員の手伝いでユニットに入り、リビング等の片づけを行ったり、意外に気づかない部分の故障や修理が必要な箇所を発見し、修理を依頼したり、短期里親と交流する子どもの日常生活が見られたり、大変ながらも意味のある時間だと感じることもできました。ある時には、仕舞ってある何台もの加湿器を箱から出すのを、中学生男子が1人手伝いにきてくれました。とても嬉しかったです。

窮屈で嫌だった思い、雇ったらどうしよう、どうなる？という怖い思いは常にありました。ただ、不便の中で、ちょっとした協力や声掛けで安心を作る努力ができたことや、ZOOMという新しい方法で実親や里親と交流したり、外部研修を受講できたりというコロナ禍だから拓けた活動もありました。

色々書きましたが、

①その時その時、何が最善かを考える。

②今があることは、『有難い』と周囲へ感謝の気持ちを持つ。

この①②を私の気持ちの真ん中に置き続けることが、学びとなりました。

.....

コロナ禍の取組みを振り返って

石部美智子（心理相談員）

2020年1月、日本で初めての新型コロナウイルスが見つかってテレビやメディアで取りあげられたことが徐々に身近な風景となったことを思い出す。

施設の中でもこれまでに経験したことのない厳しい現状の対応に追われる日々となった。子どもたちだけでなく、職員、職員の家族の感染が次々と判明してテレビで見た病院の光景と似たような隔離という形で施設内でも見られるようになった。中心会からはコロナ感染症の具体的な対応が都度更新されて、所長からの指示で日々の対応がなされていった。

心理的安全性を保つために心理としてなにができるか模索する日々でもあったが私自身、電車通勤の為、マスク着用・こまめな手指消毒等を心掛けての日々で何とか感染せずに今日に至るが健康の大切さをそれまで以上に意識するようになった。

こうした取り組みにより、みんながどうしているかを意識する、いわゆる記述的規範の

方に変化が目立ったように思う。状況によって行動が左右される。「みんなの行動」を意識にするようになったのではないのでしょうか。

一方で心理面接ができない日々が続いたり、久しぶりの心理面接で子どもたちの閉塞感に伴う怒り・ストレスを感じて無力感を実感させられた。自粛生活の中、自己効力感を得る経験ができなかったのだろう。それでも子どもたちにはとても柔軟性がある柔らかな存在と改めて知る機会でもあった。

基本的な感染症対策により体調が悪い時はしっかり休むことが集団生活で感染を広げないためのマナーと言えるような行動スタイルがコロナ禍で浸透してきたこと、当たり前の再発見・感染対策を通しての職場での連帯感等、新しい思考回路が備わったことで対人援助職として自分自身が大切にしている重要性を思い出した。

これら、多くのことを学んだコロナ禍の時間をこれからの仕事に活かしていきたいと思う。

.....

コロナ禍の3年間を振り返って

酒井博美（事務職員）

コロナが5類に移行するまでの間、自分に時間があっても職種や立場的なことからお手伝いできることが限られてしまい、とても心苦しく辛かったと感じています。

コロナ渦という非常時において、事務では多少の不便さはありませんでしたが通常とほとんど変わりなく業務を行うことができました。

日ごろから中心子どもの家の事務職員は、所長からの指示や所長が担うまでもない事務を行っていますので不在となっても特に影響はありません。

しかし、請求書に関してだけは毎月15日までに総務部へ送付する必要がありますので、事務職員不在時は所長が担うことになります。

もし「所長では対応できない、手が回らない」ということがあった場合は、養護課職員や他事業所の職員ではなく総務部に対応をお願いするのが良いと思います。

その理由は、間違えないからです。

また、中心子どもの家の事務職員が非正規であるということからも、コロナに関わらず何かあった場合は総務部が対応する体制を整えているはずだからです。

コロナ5類に移行するまでの手記

宮塚菜摘（男子養護係）

私が入職した2022年4月は、コロナ6派だったことを覚えています。

大地の家の子ども達は、友達と自由に遊びにいけない不満をこぼしていたことを覚えています。でも、コロナに感染しないように手洗いうがい、携帯用手指消毒液をきちんと持ち歩く、中高生は食事を部屋で食べる等、子ども達がたくさん協力してくれる姿に感動しました。

私は、子ども達が自由に遊びに行けない中、仕事休みの時に自分が遊びに行くのは違うなと思い自粛しました。

現場では、職員が子どもたちに感染させないように手指消毒、手洗いうがいを徹底しました。

2022年8月に、大地の家の子ども達が続々にコロナウイルスに感染していきました。隔離が嫌で泣いている子、職員の顔をみて泣いてしまう子、静かな環境での生活を満喫している子など色々な子どもたちの姿を見ました。

ただ、隔離されている子が寂しくならないように手紙を書いたり、部屋の前に行ったら声を掛ける等しました。

自分が感染しないように気を付けたことは、N95マスク、防護服を正しく着ること、今までよりも色々な場所への消毒をとにかく気を付けて行いました。

これからも、隔離の子ども達が寂しい思いや、孤独感を感じないように声掛け等行って行きたいと思います。

.....

この3年間を振り返って

山岸悠起子（男子養護係長）

2020年2月から、未知なる感染症との戦いが始まった。

3月頭から学校や幼稚園は休校（休園）。そのまま春休みを迎え、新年度が無事迎えられるようにと思っていたが、4月になっても学校や幼稚園は休校（休園）のまま。子ども達や職員に不安や戸惑いが生まれた。私自身は家族の職場で感染者が出たことにより、新年度早々出勤停止。子ども達は学校や幼稚園がなく、日中子ども対応が必要な中、私が出勤で

きず、職員（心の家、係長）には負担をかけることになり、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。当時は感染者との最終接触日から14日間が出勤停止期間だったこと、何もできない悔しさに、その14日間がとてとても長く感じた。

当時はマスクを確保するだけでも大変だった。テレビや新聞、ネットニュースでは毎日増えていく感染者数や死亡数を見ながら、感染予防のためのマスクが世の中から消える事態に不安が大きくなった。幸いにも子ども達は元気に過ごしていたが、未知なる感染症との戦いには子ども達の協力が必要で、ある程度の制限はどうしても必要となった。それでも職員は子ども達の生活が楽しいものであるように工夫をしたし、ある程度の制限はかけながらもどうしたら生活の質を落とさずにやれるかを常に考えた。正しい手洗いやマスクのつけ方も子どもと一緒に学んだ。

なかなか学校は再開せず、子ども達は苦しい思いをしていたと思うが、分散登校が始まり、徐々に通常登校へと変わっていき、学校で友達や先生に会えることを喜ぶ子ども達の様子が見られた。学校が始まってからは、外出時のマスク着用や体調管理として毎日検温すること等、感染対策に不満を漏らす子もいた。施設として、集団で生活している中で感染対策は重要となるが、一般家庭ではそんなことしていない。と話す子どもの気持ちに丁寧に向き合うことも必要だった。

私は当時中学2年生だった男子児童と「コロナ禍による外出ステップ」を考え、提案した。子どもがこうしたいと思うことを、危険性も考えながら子どもと一緒に考え、どうしたらできるようになるか、ルールや条件を出しながら形にしていった。子どもにとっても私にとっても充実した時間だった。せつかく作った外出ステップだが、その後現状に合ったものに改善していくことを子どもと一緒にできなかったことは残念に思っている。

未知なる感染症との戦いには、手洗いうがい、消毒、正しいマスクの着用が大事だとわかり、何も知らない恐怖や不安は薄くなったものの、常に感染者数は増え、特に私たちが生活している相模原市内の感染者数が増えていくことに不安が大きくなった。子ども達の体調の変化に気付けるよう気を張ったし、毎日の健康チェックを丁寧にした。過敏すぎて子どもが嫌な思いをしたり、子ども達の心配や不安を煽ることのないように気を付けた。子ども達の協力、職員の徹底した対策から、感染者が出ずに過ごせていたことは救いだっ

自分自身も不要不急の外出は控え、自分の体調をきちんと管理すること、自身の体調不良や感染以外では出勤停止にならないよう、所長と相談し、同居家族から感染するリスクがある時は施設に泊まり勤務できるようにした。出勤停止になり、何もできなかった悔しさがあつたため、出来る限り働ける選択肢を選んできた。同居家族の職場の感染状況、接触状況等、所長に報告する時にはなるべく詳細がわかるように必要な情報をあらかじめ得るようにした。ただ年度末に、同居家族の感染から自身も感染してしまい、卒園を迎える子、引き取りとなり自宅に帰ることになった子を直接送り出すことができなかったことが

本当に悔しかった。

未知なる感染症に不安を抱えながらも、中高生を中心に子ども達が協力的で、検査を受けるとき、マスクの着用、隔離等、未知だった感染症と一緒に戦ってくれたこと、今も戦い続けてくれていることを嬉しく思う。何も考えずにやれていたことが、対策を考えたり、注意を払わなければやれなくなった環境の中でも、ただただ窮屈な思いだけでなく、どうしたら楽しく生活できるかを子どもと一緒に考えたり、何をするわけでもなく子どもと話す時間が増えたり、遊ぶ時間が増えたり。そういう部分では、この3年間大変だったな、辛かったなという思いだけではなく、良い時間だったなと思う部分もあり、とにかく子どもも職員もよくがんばったなと思っている。

2022年11月。施設全体で久しぶりに大きな外出をし、当日も帰園後も体調不良が出ることなく、大きな問題もなく実施できたことが嬉しかった。何よりも、コロナ感染によりいろいろなことを我慢してきた中で、子どもも職員もとても良い笑顔で、良い時間が過ごせて良かった。

.....

コロナ禍で学んだこと

野口華穂（男子養護係）

コロナ禍の中で遊びに行けるか行けないかの子どもとのやり取りが一番難しかったうえに苦しかったです。子どもの気持ちと施設の現状の折り合わせが難しく、最初はこちらの都合を押し付けるような形になってしまい、結果として対立し上手くいきませんでした。

そこから、子ども達と対話することを意識しました。最初から『できない』と決めつけるのではなく、『どうすれば出来るのか』とプラスに考えること、子どもの気持ち、話を聞くことを意識しました。全てが上手くいったわけではありませんが、話をすることでお互い納得できる結果に落ち着いたり、関係性の構築に繋がったと実感できることもありました。そこから子どもと話して一緒に考えることを大切にしようと思えるようになりました。

上記のように大変な状況の中でも学ぶ事があり、今に繋がっていることが沢山あります。大変な事が多かったですが、成長の良い機会にもなったと考えて今後もこのような困難な事があっても学びの機会と捉えて頑張っていきます。

新型コロナが5類に移行するまでの手記

渡邊 優（女子養護係）

この3年間は、職員も子どもたちもぐっと我慢の連続のような年月でした。今まであった行事や楽しみなどの日常が奪われ、日々積み重なっていく不満や退屈さと向き合うことが厳しかったです。誰が悪いわけでもないのは職員も子どもたちも解っていたものの、友人との遊びを快くOKできない職員と、遊びに行きたい高校生など対立構造になる機会が多かったです。友達と遊びに行けない苦しさや状況はもちろん私も同じであり重々理解できたので、気持ちは同じであること、一緒に乗り越えたいことを伝えてみるも、それなら職員やめろとお決まりのパターンになり、ギスギスとした時間がたくさんありました。

けれど同時にその日々は、子どもたちの強さみたいなものも感じられました。当たり前の日常が変わり、分かりやすい楽しいことがない中でもなんとか楽しみを見出す姿や、度重なるPCR検査を文句も言わず流れ作業のように淡々と行なう姿には、私が子どもだったら出来なかったなと感じました。

あのような日常はもう来ないかもしれませんが、あの日々を職員、子どもたちが一緒に乗り越えられたことは、大げさに聞こえるかもしれませんが私は誇りに思います。ボランティアさんが出入りしてくださること、招待行事があること、どこか当たり前に感じていたことが当たり前でなかったこと、たくさんの人たちに支えられて私たちが過ごせていることを改めて感じる事が出来ました。戻ってきた日常、行事を子どもたちと一緒に楽しむことが、私は本当に嬉しいです。防護服姿の職員を見かけては子どもたちが「あおミニオン！」と呼んでいたことを懐かしく思い起こしながら、おわりとします。

.....

コロナ禍での生活で感じた苦悩

井上 翔（男子養護係）

私は、今から2年前コロナ禍という厳しい状況の中で中心子どもの家に入職しました。今思うととても過酷な状況だったと思います。私が特に印象に残っているのは2022年2月から3月ごろです。その時、当時所属していたユニット内では年少児童を中心に感染が広まっていきました。ある児童は1階にて隔離、またある児童は個室にて隔離していました。そんな中マスクを着けずに普段通り過ごしている児童もいました。私の方からは「感染が広まるのを防ぎたいからマスクを着けて欲しい」と伝えるも「別にコロナになってもいいし」と返されることもありました。当時はなんでマスクを着けないんだろうと疑問に

思うこともありましたが、今こうして振り返ってみると突然の出来事に驚いていて当事者自身も焦っていたのではないかと思いました。

私も隔離児童へのケアをしつつ、健康な児童も見なければならぬ。常にガウンとN95マスクの着用を余儀なくされ、気持ち的にも普段以上に焦りを感じてしまうことがしばしばありました。しかし、その一方で感染の拡大を最小限に抑えることが出来たという面もあります。職員が少ない中で対応に追われる日々でしたが、よい経験となりました。今後も感染予防を意識しながら子供たちと関わっていこうと思います。

.....

3年間で感じたこと

財前美紀（養護課長）

まだ終わらないコロナ。現在、コロナ5類に移行し、生活もしやすくなった。しかし、中心子どもの家は、1ユニットが12から13人の生活ユニットのため、感染対策をしなければ、一人が発熱すると、あっという間に感染拡大をする。発熱の報告を受けると、症状を確認し対応を検討する。いつも、コロナではありませんようにと思いつき取り組んできた。

2020年、コロナで当たり前のことができなくなり、子どもたちは、学校で友たちと一緒に授業を受けること、外出することなどすべての生活がストップした時は、絶望的だったと思うが、子どもたちは、前向きにそれに一つ一つ答えていたように思う。だからこそ、子どもたちは、成長した今があると思う。頭が下がる。

抗原検査、PCR検査、インフルエンザの検査。抗原検査は2023年1月から3月にかけて全職員も週に1回の検査を実施した。発熱があると、抗原検査でチェックをした。陰性であればPCR検査を実施した。PCR検査は、準備から、検査機関に郵送・持ち込みまでさまざまな工夫を行い、早く検査結果がわかり安心して生活ができるようにと、所長が機関と率先して対応にあたっていた。都内の検査機関にお願いしていた時は、都内の郵便局に持ち込みをして、早く結果がわかるようにと対応をしていた期間があった。早朝の東京タワーは何ともいえない元気をもらえる瞬間だった。

早く検査結果がわかることにより、児童の行事への参加が可能になったりもした。また、ユニット全体への蔓延を防ぐことができていた。現在は、小田原の間中病院に変更し検査をお願いしている。コロナが陰性だとわかれば、インフルエンザを疑い、通院を重ねてきた。インフルエンザとコロナが同時に発生した時は、感染経路は同じとして対応をした。

ユニット内での自室での隔離（トイレを分けること、ユニット職員のガウンテクニックの確認や汚染物の取り扱いは見えない部分もあるが、だいぶスムーズにできるようになった）

1階に居室を移動しての隔離。自立訓練室での隔離。自立訓練室は、高校生が使用をした。1階の隔離は、部屋の準備が必要になる。普段は、医務室・応接室・会議室・コミュニティホール内和室。2022年夏は、事務所隣の2つの部屋も隔離の部屋となった。トイレを識別することも徹底しておこなった。どの児童がどの場所を使用しているのか、児童だけでなく隔離対応者、他の職員もわかるように識別した。

1年前の夏、コロナが蔓延した時に簡易ベット（折りたたみベット・段ボールベット）を増やしていただいた。応接室・医務室の対応で追いつかなくなった時には、パーティションを購入していただき、会議室を隔離部屋にした。会議室には、多いときは5人が隔離となったときもあった。

給食課との連携、使い捨て容器での食事の提供や衣類洗濯用の熱湯の準備、多めのおやつ提供。時には、段ボールベットの組み立て、パーティションの組み立てもしてもらっていた。

飲み物の提供は、はじめのころは、麦茶を作り提供していたが、ペットボトルに変更して必要なだけ病児に提供をした。紙コップでの提供は児童がこぼしてしまうことが多くそのたびに掃除に入ることの手間がかかった。また、水筒での提供は、毎日の消毒の手間がかかったことから、手間の時間を少しでも減らすことにした。

隔離対応は、ガウンテクニックを徹底して感染対策を行った。

1週間ほどの期間、ベットの上での生活となるため子どもたちは、ヒマ・ヒマという言葉も多くなる。ポータブルDVDを増やし個々にビデオを見せること。ゲーム機の提供。折り紙や塗り絵の提供、工作の提供、学習の提供、時間を決めて園庭に出て遊ぶこと、散歩もした。

ヒマな時間をもてあそび、呼びボタンを慣らし続けていた児童、パーティションを滑り台にしていた児童もいた。また、イライラし、会議室の窓から抜け出し怒っている児童もいた。なだめ、戻すことの繰り返しの日もあった。

この時期は、職員の感染や発熱などで出勤停止とる職員も多くなり、ユニットに勤務する職員も少なくなった。隔離対応もピークになった。1日おきの宿直。一時保護児童の送迎。この時期一時保護児童を数名受けていた。南区の小学校のため往復2時間、1日4時間の時間の確保の送迎、電話での他機関との連携対応、業者対応、気持ちは前向きでも、体力が追い付かなくなるときもあった。

この時期は家庭のこと、掃除や洗濯・食事の準備はほぼ手抜きとなった。家族にお願いをするしかなかった。それでも文句も言わずにいてくれたことに感謝するしかなかった。

落ち着いた時に斎藤係長に20223年3月子どもが生まれることを伝えられた時には、おめでとうと共に、隔離対応を普通にこなしていた、こなしてもらっていたことに体調は

大丈夫だったのだろうか、この状態で言えなかった・言える状態でなかったのだと思い、申し訳なかった。健康でよかったと伝えた。

2022年9月コロナがだいぶ落ち着いた時に私は、コロナ陽性となった。思い当たることもなく、気の抜けた時期だったのだろうと思う。ただ申し訳ないと思うばかりだった。自立訓練室を使用させていただき、場所の提供、食事の提供などありがとうございました。

.....

寄稿

株式会社地球ファミリー一同様

コロナ禍の3年間、本当にお疲れ様でした。折りに触れ、施設の状況を伺う中で、先生方のご苦勞がひしひしと伝わってきました。未曾有の危機で、先生方も不安はあったと思います。

それでも冷静に、真心を込めて「子どもたちのために」と、対応される姿に、胸が熱くなるのが度々ありました。私たち自身、学ばせていただくことも多かったです。

かねてより、寄付をさせていただいてきたのは、私たち自身、いつもたくさんの方に支えられ、助けられているので、感謝の循環—ペイフォワードという思いからでした。継続できているのは、ひとえに、私たちの活動を支えてくださっている方々の思いあってこそです。

特に、パンデミックの3年間は、非日常の中で、チャレンジされている先生方や子どもたちへのエールの思いも強かったです。ステイホームのストレスは相当なものだったでしょうし、少しでも、日常を楽しむ一助になっていたのなら、嬉しい限りです。

今年は、やっと日常が戻ってきますね。素敵な夏休みとなりますように。

微力ながら、これからも応援しております。

.....

寄稿

写真ボランティア 川太泰夫様

コロナ禍の3年間。今思えばあっという間のことでしたが、その頃は外出もままならず、常時マスク着用と、毎日が不安と憂鬱な日々でした。ワクチンを接種したからとて全く心配無用ではなく、相模原市の“フォトシティ相模原”(PCS)をお手伝いするボランティアグ

ループ(PCSSC)の会長が、あっという間に他界。写真クラブの仲間数人が感染。恐ろしい存在となりました。

でも私らはじっと我慢すれば良かったのですが、元気一杯の子どもたちにとっては想像を遥かに超える難行苦行を強いられたことでしょう。見守る職員の方々も大変なご苦勞をされたと思います。

現在第9波とか言われており、まだまだインフルエンザ並みの心配で済む状況ではありません。日本の将来を担う子どもたちが、病気をせずにくすくすと育っていくことを願うばかりです。

丹所長はじめ、職員の皆様には気の抜けない日々続くでしょうが、子どもたちの明るい笑顔と元気な声が応援歌です。

.....

寄稿

川崎市高津区 佐藤善彦様、千鶴様

中心の子供たちへ

暑いですね。夏休みの計画はできましたか？

先生たちの言うことは聞いてますか？

勉強はしてますか？

お手伝いはしてますか？

Tシャツはいつも私と奥さんと二人で買いに行ってます。皆さんのサイズとお年を聞いて二人で「この子ならきつとこのデザインがいいかなあ、中学生ならきつと、もっと大人っぽいんじゃないといやだろなあ」とか想像を膨らませて選んでます。もしかしたら気に入らないのもあるかもしれないけど「我慢も大事」ですよ。

みんな大家族で暮らしてて、お兄さん、お姉さん、弟、妹に囲まれてていいですね。

ケンカしたり、泣いたり、次の日には笑ったり、一緒に喜んだり、最高ですね。

いつか大人になったとき最高の思い出になります。

さあ！夏休み！ Tシャツ着ていっしょうけんめい遊びましょう！

編集者注：この佐藤様のメッセージは、本年7月に子ども達全員にTシャツのご寄附を賜った時に頂きました。

私が中心さんの散髪ボランティアを始めたのは東北の震災がおきてすぐのことだったと思います。

自分のことですが、少し書かせて頂きます。

私は理容師だったため子どもと過ごす時間が少なく、自分以外の大人やお友達に関わっていただき高校を卒業させることができました。色々なことで周りの力を借りたので、僅かですが恩返しのつもりで中心さんの散髪ボランティアをはじめました。

2011年から今まで、定期的に散髪によって関わりを持たせていただきました。学校のこと、仲間とケンカしたこと、部活のこと、職業実習のこと、髪型のこと、他愛もない話がとても愛おしく思われ、楽しい時間を過ごさせて頂きました。普段から自分の置かれた環境で必死に生きる彼らの力強さに刺激を受けました。

散髪ボランティアの私がコロナ禍を忘れないために書き留めておくことは

○マスクをさせて散髪したことが正しかったのか？

○お話を控えて髪をカットすることが正しかったのか？

○私の事情に子どもを巻き込み、子どもの意見は聞かなくてよかったのか？

ということです。

私は自分のした行為をととても残念に感じております。もし次に同じようなことがあれば子どもたちの顔を見ながら、会話を楽しみ散髪をしたいと思います。

こんな私ですがこれからもよろしく願いいたします。

《おわりに》

所長 丹 清

この3年間、職員の皆さんの献身やそのご家族の協力、子ども達の協力の姿から、思い描いた目標は達成できたと思います。児童養護施設でのこの取り組みは、単に感染症対策に留まらず、それを通しての人的成長に繋げていきたいと思っていました。

職員同士、子ども同士が互いに何があっても誹謗中傷したりしなかったこと、これは最も尊いことであり、子どもの最も身近にいる職員、その職員を支える指導監督職の日頃の営みの賜物であると思います。

私達を多くの方々が応援して下さいました。陽性者が増え、なおかつPCR検査キットが足りなくなって動きが取れずに困っている時、本法人の総務部の職員が届けて下さったり、私が体調不良で長期離脱した時に、相模原南児童ホームの所長・副所長が中心子どもの家に交替で来て下さったりと、本当に多くの方々にお世話になった3年間でした。

ここで、忘れてはならないことの代表例として、相模原市内の洋菓子店「モンシェリ」の店主である小林さんを挙げさせていただきます。小林さんはこの3年間、1度も途絶えることなく子ども達のバースデーケーキを作って下さいました。感染症発生時の困った時のご支援は有難いものです。しかし、平時と変わらず営々とバースデーケーキをつくり続けて下さったことに、私達は畏敬の念に打たれます。

また、小田原市にある間中病院PCR検査センターのスタッフの皆様には、検体を直接持ち込むことを認めていただきました。そのお陰で、陽性者の早期発見による感染拡大防止、職員の出勤停止の解除や、子ども達の登校停止解除を最速で進めることができました。この影響はとても大きかったです。

本法人の理事長はこの3年間、土曜・日曜もなく、それこそ不眠不休で法人全体を指揮して下さいました。夜遅くに報告の電話を入れても、いやな顔ひとつなさらず、快く対応して頂きました。頭が下がる思いでいっぱいです。

これを書いている今日（9月7日）、当施設では複数の児童・職員が陽性となり、療養中です。5類に移行しても、まだまだ続くこの困難を、私達中心子どもの家の職員は松下幸之助のいう「感謝報恩の心」を持って成長していきたいと思います。そのために、この手記のタイトルに借用した次第です。

感謝報恩の心 人間とはなにか

感謝報恩の心を持つということは、人間にとってきわめて大事なことである。いうまでもないことであるが、人間は自分一人の力で生きているのではない。いわゆる

天地自然の恵みというか、人間生活に欠かすことのできないさまざまな物資が自然から与えられているのである。また多くの人びとの物心両面にわたる労作というものがあって、はじめて自分の生活なり仕事というものが存在し得るのである。いいかえれば、自然の恵み、他の人びとの働きによって、自分が生きているわけである。

そういうことを知って、そこに深い感謝と喜びを味わい、そしてさらに、そうした自然の恵み、人びとの恩に対して報いていくという気持ちを持つことが大切だと思う。そういう心からは、いわば無限の活力とでもいうものが湧き起こってこよう。それが事をなしていく上で非常に大きな力となってくると思う。